

報道関係各位  
PRESS RELEASE

精神科病院ではじまるアーティスト・イン・レジデンス

2025年7月11日  
医療法人社団大和会 大内病院

# O-HAG おはぐ Vol.1

## 8月29日(金) アーティスト募集開始

医療法人社団大和会大内病院では、

アーティストが1年間、大内病院や周辺の関連施設で滞在・創作・交流するプログラム

「Oouchi Hospital Artists' Guild【O-HAG(おはぐ)】」を始動します。

ここで「Guild(ギルド)」という言葉を選んだのは、アーティストだけでなく、患者やスタッフ、地域住民など、内面に「何か」を眠らせている人々が互いに影響を受けつつも、ここでしか生まれ得ない自分だけの表現を  
掴んでいく、そんな姿を思い描いているからです。

この取り組みに関心のあるアーティストからのご応募をお待ちしています。

病院外観



病室(多床室)



### 大内病院について

2024年にリニューアルオープンした228床を有する精神科病院です。精神疾患のある人も、そうでない人も、さまざまな人が、地域にあるそれぞれの居場所で、安心して暮らす社会を目指し、「自分の暮らしに戻るための入院医療」と「生き心地のよい地域づくり」を両軸に、病院も含めた地域で支える「精神ケア」の実践を目指しています。

## オンライン説明会

アーティストに向けて、O-HAGの説明、質疑応答などを行います。

**日時** 8月29日(金) 19:30~

**形式** オンライン (Zoom) **参加費** 無料

**登壇** 武久 敬洋 (平成医療福祉グループ代表/大内病院理事長)  
岡 師明 (大内病院事務長)  
荒川 真由子 (大内病院アートコーディネーター/作業療法士)

**お申し込み** 右記のQRコードもしくはURLの  
フォームよりお申し込みください。

<https://forms.gle/FeheDXBAZw4tfsmx7>

**締切** 8月25日(月)

※後日、アーカイブ動画をアップロード予定です。

オンライン説明会  
申し込みフォーム



問い合わせ先

医療法人社団大和会 大内病院 地域精神ケア事業部 荒川 [✉ o-hag@hmw.gr.jp](mailto:o-hag@hmw.gr.jp)

OOUCHI  
HOSPITAL  
ARTISTS'  
GUILD

Vol.1

# O-HAG おはぐ Vol. 1

## 募集要項 1/2

2025年7月11日  
医療法人社団大和会 大内病院

### 応募方法

募集要項をご確認のうえ、右記のQRコードもしくはURLのフォームよりお申し込みください。

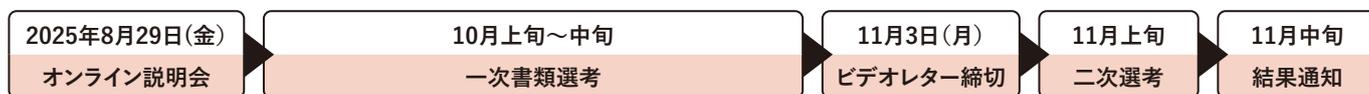
<https://forms.gle/j3igdRhkC7XcHPt3A>

応募フォーム



**募集期間** 2025年8月29日(金)～10月3日(金)

### 今後の予定



※選考結果にかかわらず10月20日(月)を目途にご連絡いたします。

※二次選考に進まれる方にはビデオレターを提出いただくよう個別でご連絡いたします。

### 滞在スケジュール

**滞在可能期間** 2025年11月下旬以降

**滞在日数** 1年間

1年間のうち前半はコア期間、後半はフレックス期間として滞在いただきます。

【コア期間】病棟やデイケア等での連続した長期の滞在・創作・交流

【フレックス期間】1か月に1回や数か月のうちの1週間など短期の滞在・創作・交流

コア期間とフレックス期間の割合は相談のうえ決定します。

11月下旬からスタートし、  
コアとフレックスを  
6か月ごとにした場合の例

2025年11月～2026年4月 コア期間(6か月)

11月 滞在開始、歓迎イベント(自己紹介)<sup>※1</sup>  
病棟やデイケアでの滞在・創作・交流  
4月 活動成果の発表<sup>※2</sup>

2026年5月～10月 フレックス期間(6か月)

5月 月1回程度の滞在・創作・交流  
病棟やデイケアでの滞在・創作・交流  
10月 ふりかえり会<sup>※3</sup>

※1 滞在開始にあわせて、自己紹介を兼ねた歓迎イベントを行います。

※2 活動成果の発表は予算の範囲内で相談しながら1年間のうちに複数回することも可能ですが、コア期間終了時には展示、ワークショップ、パフォーマンス・公演、トーク等いずれかの形態で行っていただきます。

※3 アートコーディネーターやスタッフ等が参加するふりかえり会に参加いただけます。

### 募集人数

1名を予定

### 宿泊・活動場所

大内病院(〒123-0841東京都足立区西新井5-41-1)

- 宿泊場所は病院が所有する施設がご利用できますが、お近くにお住まいの場合にはご自宅から通っていただくことも可能です。
- 活動場所は大内病院病棟、精神科デイケア、重度認知症デイケアはなみずきのいずれかになります。
- どちらの施設で活動いただくかは滞在開始時にあらためて見学いただき、相談のうえ決定します。

病院Webサイト



### 応募条件

- アーティストであること(ジャンルは問いません)
- 18歳以上であること
- 滞在中の生活を自身で維持できること
- 日本語でのコミュニケーションが可能なこと
- 滞在スケジュールに記載の歓迎イベントや、活動成果の発表、ふりかえり会を含む、病院が提案するスケジュールやルールに柔軟に対応できること
- 活動成果の発表は、アーティストの責任の下、作品等の維持・管理を行うこと
- 滞在終了時には滞在場所や宿泊場所を原状復帰の状態に戻すこと

OOUCHI  
HOSPITAL  
ARTISTS'  
GUILD

Vol.1

# O-HAG おはぐ Vol. 1

## 募集要項 2/2

2025年7月11日  
医療法人社団大和会 大内病院

### サポート内容

#### コア期間・フレックス期間共通

- 病院施設(病棟、デイケア等)内での活動
- 宿泊場所(水道光熱費込み)
- 宿泊場所や病院内でのWi-Fi使用
- 職員向け食堂での昼食提供(朝食と夕食はご自身でご用意ください)
- 交通費(居住地から大内病院までの往復交通費)年間を通じて上限30万円
- 病院施設(病棟、デイケア等)内で活動するためのサポート(希望に応じて1日のふりかえり、場所の相談、患者やスタッフとの接し方など)
- 広報協力

#### コア期間のみ

- 活動費:1日3,000円を日数に応じて支給
- 活動成果の発表にかかる制作費:上限30万円(調査費・材料費・設置費・撤去費・運搬費を含む)

#### フレックス期間のみ

- 活動費:月額3万円
- 活動成果の発表とは別に、ワークショップ・レクチャー・トーク等のプログラムを実施する場合には相談のうえ、必要な材料費や経費を大内病院が負担します。ただし、支払金額には上限があります。

### 応募に際し提出する内容

フォームから以下の内容をご入力いただけるようになっております

- 氏名、活動名(氏名とは別にある場合)、生年月日、メールアドレス、電話番号、住所
- ジャンル(複数選択可)美術、音楽、演劇、舞踊、写真、文学、その他(具体的に)
- この募集をどこで知りましたか?(複数選択可)
- プロフィール(400字以内を目安にご記入ください。)
- プロフィール写真または画像(応募者ご自身を特定できるもの)
- 応募動機(800字以内を目安にご記入ください。)
- 滞在開始時期のご希望
- 現時点での1年間の活動イメージ(コア期間とフレックス期間の目安、またそれぞれの活動のイメージをご記入ください。)
- 活動イメージに関する図やドローイング(ある場合にはWeb上で確認できる方法で提出ください。(ファイル転送サービス、GoogleDriveへのアップロード等))
- 宿泊場所のご希望(使用の有無)
- ご自身の活動が分かる資料のURL(最大3点まで)動画・音源・画像等、活動の様子が分かるものを、Web上で確認できる方法で提出ください。(ファイル転送サービス、YouTubeでのアップロード動画等)

### 選考について

一次選考は平成医療福祉グループ代表/大内病院理事長の武久敬洋と、大内病院アートコーディネーターの荒川真由子が応募フォームの内容をもとに選考します。選考結果は、通過・不通過にかかわらず2025年10月20日(月)を目途にご連絡いたします。

二次選考に進む方には、ビデオレターの提出を個別に依頼します。

提出されたビデオレターは、院内の患者さんや病院スタッフ等の関係者にも共有され、選考に活用させていただきます。ビデオレターは、応募フォームでは伝えきれなかった思い、個性、コミュニケーション能力を測るためのものです。



## message.

2025年7月11日  
医療法人社団大和会 大内病院

### 大内病院でアーティスト・イン・レジデンスを行う理由

初めに嘘偽りなく語るならば。  
日本の精神医療をより良くするために、私はアートを利用しようとしている。  
精神科病院で最も大事なものは医療ではなく、ケアだ。  
私は、「じぶんを生きる」を支えるすべての営みを、ケアと定義している。  
ケアにおいて、専門性も立場も、本来は存在しない。  
「ひとりの人として、ただそばにいる」こと。  
それがケアの出発点である。  
すべての人はあらゆる部分で異なっている。だから、ケアには正解がない。  
病気や障がいの有無に関係なく、何らかのケアがないと、人は生きていけない。  
アートにも正解はない。  
立場や専門性、病気や障がいの有無は関係ない。  
わからないものを、わかろうとして、ただ観察する。  
それでも完全にわかることはできない。だからこそ、試行錯誤しながら探求を続ける。  
医学は、標準偏差の外れ値を「異常」とすることで、正解のある学問にしてきた。  
高度に専門的で緻密な判断が必要な場面、緊急性の高い咄嗟の判断が生死に関わる場面では、  
個別最適であることは二の次となる。  
だからこそ、統計的に正しいとされるガイドラインに従った治療を行うことが正しいとされる。  
また、専門性をまとうことで、医療者と患者の関係性は固定化され、患者は従うしかない構造ができてしまった。  
しかし、精神科医療や回復期・慢性期医療の世界では、そうした従来の価値観と関係性が、「じぶんを生きる」ことを妨げる。  
わからないものを、わかろうとして、ただ観察する。  
それでも完全にわかることはできない。だからこそ、試行錯誤しながら探求を続ける。  
業界文化や市場の論理の影響を受けていない純粋なアートとケアの本質は、  
深いところではきっと同じだと思う。  
アートの場を、患者さんやアーティストと共にすること。そして、自分もアートしてみることに。  
病院がアートの場になれば、従来の医療の価値観に風穴が開く。  
そしてその風穴から、ケアが広がる。  
これが、私が大内病院でアーティスト・イン・ホスピタル(O-HAG)を開催する目論見だ。



Photo: 生津勝隆

平成医療福祉グループ代表 / 大内病院理事長

武久 敬洋 (たけひさ・たかひろ)

徳島県神山町在住。3人の子どもの父。2010年、平成医療福祉グループへ入職。以降、病院や施設の立ち上げなどに関わりながら、グループの医療・福祉の質向上に取り組む。2022年、グループ代表に就任。共同編集した著書に『慢性期医療のすべて』(2017 メジカルビュー社)がある。

OOUCHI  
HOSPITAL  
ARTISTS'  
GUILD

Vol. 1



苦心と収穫の連続です。

O-HAGを始めるにあたって、わたしは「病院がアーティストを搾取するような場になってはならない」と強く思っています。

お互いに異なる道を行ってきた者同士が、それぞれの考えや行動に違和感を覚えつつも、時間を共にすることで、完全に溶け合うことはなくとも、お互いが響き合い、新たな気づきを得られる場となることを願っています。

わたしは作業療法士として大内病院に入職したのち、現在はアートコーディネーターと名乗るようになったものの、その狭間で揺れながら、これまでいくつかのワークショップを病棟やデイケア等で実施してきました。

その中で「孤独」を感じることは正直何度もありました。他のスタッフと対立していたわけではありません。

それでも、自分が大事にしたいと思ったことが、ごく自然に“もっと簡単に”“好きなことで”“患者さんができそうなことで”といった言葉で、いとも簡単に押し流されてしまう。そのたびに、「あれ？」と感じるのは自分だけのようで、

静かに傷つくことがたびたびありました。でも、それは悪いことばかりでもありませんでした。

スタッフからの言葉に押し流される中で、どうしても流されたくないと掴み続けたものこそが、

わたしにとっての「アート」なのだと思われたからです。

この病院のスタッフの素晴らしいところは、押し流したまま見放さず、しっかりと話し合いに参加し続けてくれるところです。

独りよがりだったプログラムが、流されたくないと掴んだ核心を残しつつ、

スタッフとの関わり合いのなかで肉付けされていく瞬間に出会えます。

アートと医療の間で揺れながら、自分自身の「アート」が改めて問われ続ける、

それが、ここ大内病院でしか体験できない滞在・創作・交流なのだと思えます。

#### フレックス期間を設けた理由

アーティストもO-HAGのギルドのひとりとして、ゆったりと、有機的な関係性を紡いでいってほしいという考えがあるからです。

当初、大内病院でのレジデンスは他のアーティスト・イン・レジデンスにならって、2〜3か月程度の滞在を想定していました。

ところが、病院やデイケア等で別のワークショップを実施した際、ワークショップの打ち合わせ中に思いもよらない突

飛なアイデアを病院職員から聞いたり、ワークショップ開催時には患者さんが普段から作っている作品を見せて来てくれたりと、この人たちは内面に「何か」を眠らせている、そう思う瞬間がたびたびありました。例えばアーティストが滞

在して、活動成果を発表してもらった後にも、まだまだ一緒に何かをやってみたり、交流してみたくなるかもしれない。そ

うであれば、連続した滞在ではなくとも、アーティストが気軽に病院にアクセスできるような期間があってもいいのかもしれない。

こういった考えからフレックス期間を設けることにしました。



大内病院アートコーディネーター / 作業療法士  
荒川 真由子 (あらかわ・まゆこ)

2010年よりフリーランスで商業演劇の現場において制作助手や当日運営を経験したのち、2013年にはKAAT神奈川芸術劇場に勤務。2014年から2020年までは国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」制作。関わった作品は『フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園』(2014-2016年)、『わたしが悲しくないのはあなたがが遠いから』(2017年)、『NOWHERE OASIS』(2019年)など。その後、再度大学へ入学し、作業療法士の資格を取得した。